春秋

カエデやケヤキの若葉にすがすがしい風が吹き渡る。風薫る5月である。「五月来ぬ心ひらけし五月来ぬ」（星野立子）。新緑の生命力に癒やされる美しい季節がめぐってきた。心ひらけし、とは陰りのない、真っすぐな言葉だ。晴れ晴れとした気持ちが伝わってくる。

▼去年の今時分、何をしていたのか。覚えておられる方も多いはず。平成の30年余りの時代が終わり、5月1日から令和に元号が改まった。東京・渋谷のスクランブル交差点には、雨がそぼ降るなか、改元カウントダウンで盛り上がる人波が寄せた。ネット上の動画を見ると、ハチ公前は身動きができないほどの密集だった。

▼恐ろしい。と、感じてしまうのは、すっかり巣ごもり暮らしになじんだせいか。去年は10連休だった。2400万人以上が帰省や国内外の旅行を楽しんだ。昭和から平成の代替わり当時の重苦しい自粛ムードは、みじんもなかった。思い思いに休日を楽しんでいた。わずか1年前のことだが、はるか昔のように感じられる。

▼立子の父は俳壇の巨頭、高浜虚子。春が尽き初夏を迎えるこの時期の句がある。「春惜む命惜むに異らず」。晩年の作だ。父と娘の感性の違いが際立っていて興味深い。出会いと別れを繰り返した春を懐かしんでいると、命のはかなさを感じてしまう。そんな境地か。今の私たちの胸に響くのは、虚子の一句かもしれない。

編集手帳

いま時分の季節に、藤棚を通りかかった人がいたのだろう。江戸川柳に、

＜春夏をふらふらまたぐ藤の花＞とある◆暦の上では立夏（5日）が来れば夏を迎える。日差しがにわかに強まり、春のような夏のような――そんな体感のなか、藤は季節をまたぐように咲く。薄紫の花がふらふらと風にそよぐ景色が、みなさんのご近所にもおありだろう◆福岡県八女市の神社には樹齢600年に達し、国の天然記念物に指定される「黒木の大藤」がある。だがこの地元のシンボルともなる藤棚で、一輪と残さず花を刈り取る作業が行われたという◆新型ウイルスの感染拡大を受けた措置である。見頃を迎えた藤棚に連日見物客が押し寄せ、密集を防ぐために苦渋の決断がされたと、本紙西部本社版が伝えていた。目下、刈られた花以上に痛々しいのが私たちの暮らしだろう。仕事やアルバイトを失った。家賃、学費が払えない。無情に移ろうばかりの季節のなか、ウイルスとの消耗戦はまだまだ終わらないとの報を聞く◆がんばりきれるかどうか。悲嘆を外に押しやってつぶやいてみる。藤は下がりながらも咲くじゃないか、と。

交遊抄

柔軟な発想

藤沢　一就

囲碁を教えていて、柔軟な発想に感心した。ドワンゴを創業し、カドカワ（現KADOKAWA）社長を務めた川上量生さんだ。既存のかたちに縛られず、自然に打ってバランスが取れる大局観がすばらしい。知り合ったのは十数年前、ニコニコ動画のスタート前だった。

対局の合間に数学やITの世界潮流を聞いていた。すると4年前、囲碁の人工知能（AI）で世界一をめざすプロジェクトを始め、1年あまりで世界AI大会で優勝してしまった。私も参画し、ディープラーニングの仕組みを間近に見たのは刺激になった。

AIは人間の脳を模して作られた。ならば、その仕組みは人間を鍛えるのに役立つはず。子供囲碁教室での指導法の参考になった。現在の生徒数は200人を超し、すでに11人のプロ棋士も育った。世界的な棋士の育成は、私の父、藤沢秀行名誉棋聖の夢でもあった。

川上さんは最近、通信制のN高に没頭し、私も囲碁部顧問を務めている。弟子の上野愛咲美女流本因坊が今春卒業するなど、プロ棋士もたくさん学ぶ。新型コロナウイルスで私の囲碁教室にも生徒は通えなくなったが、ネットを活用した囲碁指導「藤沢塾」を始めた。川上さんの柔軟な発想が刺激になる。（ふじさわ・かずなり＝囲碁棋士八段）

交遊抄

ものづくりの鬼

酒井　誠

私が尊敬する「ものづくりの鬼」が米国にいる。米調査会社ムンロ・アンド・アソシエイツのサンディ・ムンロ代表だ。自動車を分解して調査するプロで、大の日本びいき。たこ焼きが大好物で、来日した際に一緒に食べに行ったこともある。

仲良くなったのは2016年ごろ。デトロイトを訪れたときに車の分解調査を手掛ける彼の会社を知り、今思えば失礼ながら興味本位で会いに行った。日本からの客として歓迎され、すぐに車部品の話で花が咲いた。驚くほどの造詣の深さに「この人は本物だ」と興奮したのを覚えている。

冗談好きでちゃめっ気があり、飲み会の席ではものまねも披露する。ただ、ものづくりの話になると目の色が変わる。

17年に東京を観光したときのこと。港区の増上寺の鐘つき堂をまじまじと見上げて「酒井さん、寄せ木の構造が面白いですよ」といきなり解説を始めた。69歳になっても衰えない探究心が垣間見えた瞬間だった。

米国の自宅にこいのぼりをかざるほど日本好きなムンロ氏。新型コロナウイルス問題が落ち着いて来日するのを楽しみにしているようだ。また日本で酒を酌み交わすのが今から待ち遠しい。（さかい・まこと＝マークラインズ社長）

2020. 5. 9

春秋

インドシナ半島から南にすらりと伸びたマレー半島。その中央部あたりの西側、アンダマン海に浮かぶプーケット島は、アジアで指折りのビーチリゾートとして知られている。淡路島より小さなこの島が1年間に海外から受け入れる観光客はおよそ1000万人という。

▼それだけに新型コロナウイルスの影響は甚大だ。ヒトの出入りが活発なためにタイでは最もはやく感染が拡大した地域のひとつとなり、ロックダウン（都市封鎖）の措置が導入された。ビーチは閉鎖され、最大の玄関口である国際空港も4月10日から閉じたまま。当初は5月に入れば再開としていたが、16日に延期された。

▼一方で先ごろ、ほっこりするニュースが現地から伝えられた。現生するカメの仲間としては最大級のオサガメの巣穴が、この20年のうちで最も多く確認できたというのである。観光客が減った結果、砂浜がカメたちに暮らしやすい環境になったらしい。絶滅が危ぶまれるだけに、保護に携わる人たちの喜びは大きいようだ。

▼やはり絶滅危惧種であるジュゴンの大群がタイ南部の海で確認され、悪名高い中国やインドの大気汚染が改善し……。コロナ禍が環境にプラスに働いているとする報告は多い。ヒトの営みが自然に負荷をかけてきたことを改めて痛感する。にわかに浮上した「新しい生活様式」の模索。感染対策だけにとどまらないのかも。

2020. 5. 11

春秋

ニューヨーク近代美術館は1930年代、世界に先駆けてデザインの収集を始めた。美術といえば絵画や彫刻という時代である。それでも工業製品やポスター、はてはヘリコプターまでをせっせと集めたのは、そこにそれぞれの時代の様相が見えると考えたからだろう。

▼その収集品の一つがレインボー・フラッグである。LGBT（性的少数者）の集会などで目にするあの旗だ。78年、米国の芸術家ギルバート・ベイカーが考案し、青は調和というようにすべての色に意味がある。多くの協力者と布を染め、手縫いした巨大な旗は、サンフランシスコ市のゲイ・パレードで初めて掲げられた。

▼いまやレインボーは懸け橋の象徴として定着している。コロナ禍で外出が制限された欧米では虹の絵を手に窓やバルコニーに立って励まし合い、医療従事者らにエールを送る人が相次いだ。ベイカーの旗が「寛容や連帯を呼びかける力強いシンボル」であるように、虹の絵も困難を共に乗り越えようと願う心のあらわれだ。

▼レインボー・フラッグの制作を主導したのは同性愛を公言していた市会議員でパレードの5カ月後に暗殺された。カラフルな旗は不寛容と暴力の時代の陰画でもある。いずれコロナの時代を証言するデザインも生まれる。将来に発するメッセージは協調の力、それとも利己主義ゆえの分断か。私たちの行動にかかっている。

編集手帳

池波正太郎さんの時代小説には食欲をそそる食材がしばしば登場する。名場面を集めた『梅安料理ごよみ』（講談社文庫）に初夏の日をつづった一節がある◆鍼医者・梅安と相棒の彦次郎との鰹を巡るやりとりがいい。まずは刺し身で楽しみ夕餉は〈肩の肉を掻き取り、細かにして、鰹飯にしよう〉と彦次郎。よく湯がいてよく冷まし〈ていねいに揉みほぐさなくてはいけない〉と梅安が応じる。薬味は葱だ、とも◆蝦蛄の煮つけに秋茄子の塩もみ、大根と油揚げの鍋仕立て…。目次には季節ごとに料理の名が並ぶ。四季折々、日本人は旬の味をどれほど好み、大切にしてきたのかとしみじみ思う◆戸を閉めたのは桜の散り終わり、新緑へ季節が巡り、いまだ開けられない。そんな料理屋さんが少なくない。「当分の間、休みます」。雨風に打たれ、しわしわになった貼り紙を見た◆半年先まで使える食事券を買う。ネットを介して寄付をする。スマホで食事代を先払いする。なじみの店を救おうと、様々な取り組みが進む。なに、アジやイワシ、キス等々これからが旬の魚が数々ある。どうか持ちこたえて、と祈る。

2020. 5.10

編集手帳

きのう花屋さんを通りかかって、たまたま知ったことがある。今年「母の日」は「母の月」へ――こんなポスターが貼り出されていた◆カーネーションなど花のプレゼントを分散化するため、業界団体が5月を丸々お母さんに感謝する月にしようと呼びかけたものだ。むろんコロナ対策である。店の混雑や配送業の負荷を和らげるためという◆小欄にも高齢の母がいる。本来の母の日の2日前に偶然知ったことを書くのは、忘れていたのを白状するようで恥ずかしい。でも子供たちはしっかり覚えていることだろう。まさに今、学齢期の子を持つお母さんたちは大変である◆勉強や運動不足の心配をしたり、朝昼晩と食事を用意したり。食品売り場でケーキの粉や一部乳製品が品薄になっていると聞く。家族だけでいる時間が長くなり、おやつの共作にも手取り足取りで奮闘するらしい◆本紙歌壇の入選作を思い出す。〈蒔をとり苺に牛乳かけるとき一つ一つが母として浮く〉（砂山ふらり）。まだ学校の再開されない地域は多い。せっかくなので、お母さんへの感謝の思い出がたくさん残る「母の月」になるといい。

2020. 5. 9

編集手帳

エベレストの頂上は、2畳ほどの広さしかないという。その地を目前に、冒険家の植村直己さんは7歳年上の松浦輝夫さんに「先に行って下さい」と先頭を譲ろうとした◆最後は「一緒に行こう」と、並んで頂上に立つ。『戦後50年にっぽんの軌跡〈上〉』（読売新聞編集局）にある。酸素が薄い標高8848㍍の極限状態でも互いを思いやる気持ちに心打たれる。ちょうど50年前の5月11日、2人は日本人初のエベレスト登頂に成功した◆そこから見下ろした世界は今、新型コロナウイルスの流行で極限状態に近い。気になるのは、国同士の思いやりの欠如だ。マスクなどの医療物資を囲い込んだり、食料輸出を制限したり◆ウイルスの発生源を巡る米中の論争も激しい。検証は必要だが、もっと大事なことがある。各国の知見を集めてウイルスを封じ込め、ワクチンや治療薬を開発することだ。感染症との闘いを覇権争いにすり替えてはならない◆経済活動の再開に動く国も相次ぐ。新たな感染者数を示すグラフが、下り坂にさしかかったためだろう。でも油断は禁物。登山では上りより下りの方が難しいと聞く。

2020. 5.11

春秋

「われわれの文明は、印刷された書式の魔力にとらわれている」。「マネジメントの発明者」といわれるピーター・ドラッカー氏は、主著の「現代の経営」（上田惇生訳）でこう書いている。文書の定型な書き方を規範とみなし、柔軟さがうせる様子を批判したものだ。

▼よくある間違いは、報告や手続きを上からの管理の道具に使うことだとも指摘している。工場長は自らの仕事には必要のない情報も集めて本社に知らせるようになる。現場の社員が報告書の作成に時間をとられ、本来の仕事がおろそかになった保険会社の例も挙げている。無益な作業が組織全体で増殖していく愚かしさだ。

▼緊急経済対策に盛られた給付金や助成金も、厳正な管理をめざすあまり、手続きがいたずらに煩雑になっていないか。極め付きは従業員に休業手当を支払う企業への雇用調整助成金だ。書類に記載する項目が73もあった。減らした後も38にのぼる。経営者は申請に費やす時間を新規事業の思案にでも使いたいところだろう。

▼手続きが「アマゾンのジャングル」のようにはびこっていた組織が、窒息しそうな状況を打開した例をドラッカー氏は紹介している。あらゆる報告を2カ月廃止し、どうしても必要なものだけ復活させることにした。すると報告の4分の3は不要だったという。「現代の経営」は刊行から60年以上たつ。今なお示唆に富む。

編集手帳

春雨は「はるさめ」と読む。秋雨も「あきさめ」である。なのに夏雨は、「かう」と読むのがいいらしい◆天気エッセイストの倉嶋厚さんらが編者となる『雨のことば辞典』が薦めている。音読みの方が雨脚が太く豪快な感じがするからと。一般の辞書にないこの語は、中国・宋書の〈時に夏雨、城を攻むるを得ず〉の一節が出典となる。いきなりの豪雨が城攻めを中断させた様子を伝えるものだという◆沖縄地方が梅雨入りした。前線が列島に広くかかるのはいつ頃だろうか。優しい雨の日もあれば、そうでない日もある◆洪水、山崩れ…時に甚大な被害をもたらす夏雨に、今年はとりわけ注意が必要だ。コロナの収束をうかがいながら、「新しい生活様式」を受け入れながら、夏の玄関口に来た。不慣れなこと、気をつけなければならない変化が山ほどあるなかで、いざという時の命を守る行動を常に胸にとめておくことが大切だろう◆きのうは各地で晴れ、30度以上の真夏日になる地域もあった。午後、テレワークの気分転換にベランダに出ると、入道雲を見かけた。太陽の強い光を受けて、ギラッとしていた。

交遊抄

国分寺学派を作ろう

岡本　英男

「後世に残る『国分寺学派』を築き上げたいですね」。経済産業省参事官の中野剛志さんからの励ましに大いに勇気付けられている。

東京都国分寺市にある本学は今年、創立120周年を迎える。明治の実業家、大倉喜八郎による建学の精神は実学教育と学問の融合。私も本学から現実に根差した経済学の新潮流を生み出したいと考え、個人的に「国分寺学派」と名付けた。現在主流の新古典派経済学の源流の「ウィーン学派」にあやかったが、もちろんまだ学派ができたわけではない。

だが、昨年お会いしたばかりの中野さんと話すうちに百年の知己の如く意気投合し、夢が現実になりそうな気がしてきた。まだ50歳前だが、ドイツ歴史学派の経済学や英米の政治経済思想などにも精通し、最近は現代貨幣理論（MMT）にも独自の見解を発表する論客だ。

「混迷する資本主義を鍛え直す」。こんなテーマを掲げた先日の本学記念シンポジウムで私は中野さんと本学創立者と親しかった渋沢栄一のほか福澤諭吉、高橋是清、石橋湛山の思想と実践について語り合った。中野さんは渋沢らの著作も実に深く読み込んでおり感心した。中野さんをはじめ若い力を結集すれば混迷する経済社会に一石を投じられると思う。

（おかもと・ひでお＝東京経済大学学長）

2020. 5. 13

春秋

「氷雨降る一日をこもりマスク縫ふ　ウイルス猛威の世界の隅で」（小知和弘子）。先日の日経歌壇にこんな短歌があった。人と人との接触を抑えられた異様な日々。世界を覆う、その不条理を静かに詠んだ歌が胸を打つ。三十一文字の文芸の、なんとしたたかなことか。

▼いま新聞などの歌壇俳壇には、この歴史的厄災にまつわる投稿が殺到している。とりわけ短歌は時代を映しやすいから、どのメディアでも「コロナ詠」が全盛だ。「長嶋茂雄さんと握手したから洗はないなつかしきかな　泡を立てつつ」（唐木よし子）。読売歌壇に載った軽やかな歌にも、一変した社会への嘆きがにじむ。

▼痛苦を生々しく詠んだ作品も多い。朝日歌壇で目を奪われた一首は「新コロナ感染者担当のミッションを『赤紙』と呼ぶ医療従事者」（木村泰崇）。しばしば戦争にたとえられるウイルスとの闘いだが、医療現場の過酷さこそ戦争そのものだと気づかせる歌である。こんどの疫病はすでに、世界で30万近い数の命を奪った。

▼それでも、明けない夜はない。イラストレーターのタナカサダユキさんが、SNSで披露した歌をご存じだろうか。「しばらくは　離れて暮らす　コとロとナ　つぎ逢ふ時は　君といふ字に」。漢字の「君」を分解すると、なるほど「コ」「ロ」「ナ」の3文字。みごとなユーモアのその先に、希望の灯がまたたいている。

編集手帳

毎年5月12日は「看護の日」。ナイチンゲールの生誕日に由来する。きのうがその日だった◆日本看護協会が募集する作文の今年の入選作に、感謝の思いを伝える言葉遊びを見かけた。作者は山口県の中野淳子さん。腸炎で入院中の体験をもとに、タイトルは〈魔法の言葉「かんごしききます」〉としてある◆㋐変わりないですか㋑んーと、中野さん㋒ご飯全部食べられましたか㋓失礼します㋔今日担当の○○です㋕気分はどうですか㋖また何かあれば言って下さい㋗すぐ行きます――「ききます」は「聞く」「効く」のどちらにもとれるように平仮名なのだろう◆今この時間にも感染防護服に身を包み、魔法の言葉をかける人々がいるにちがいない。無事に退院する患者を見送ることもあれば、助けられなかった患者の最期を看取ることもある。生死を分ける現場に身を投じる医療従事者の辛苦はいかばかりだろう。感染はピークを過ぎたのか減少傾向にある。病棟で身を粉にして働く人の頑張りが大きいことは言うまでもない。効いています◆まだ緩んではいられない。現場の負担を減らす努力なら、みなできる。

2020. 5. 13

春秋

スーパーに手ごろな値で刺し身用のブリが並んでいた。さっそく買って、冬場のよりも臼みがかった一切れを口にする。上品な脂がほどよく乗り、おいしい。きのうの本紙にも「夏ブリ異例の漁獲好調」との記事があった。千葉県など太平洋側でよくとれているようだ。

▼時ならぬ豊漁のめぐみに加えて、近ごろは、これまで値が張って手を出しにくかった魚介類も求めやすくなり、鮮魚の売り場は華やかさを増した感がある。新型のコロナウイルスの感染拡大で多人数の宴会が取りやめられ、さらには飲食店からの引き合いも減って、地域のありふれた店舗にしたたり落ちてきたのであろう。

▼マダイは1サクが400円前後、煮付けにも刺し身にもできるキンメダイが1尾1000円ほど。ホンマグロだって背伸びすれば買えそうだ。漁業関係者は安値ゆえの苦境にあるに違いない。ならば、不漁で去年はなかなかお目にかかれなかったサンマやイカの分まで食べ、激減した需要を微力ながら下支えしたいものだ。

▼政府が今日にも東京都や大阪府などを除き、緊急事態宣言の解除を表明する。日常が着実に取り戻せれば、高級な魚介も本来行くべき場所へおさまるのだろう。解除後も密閉、密集、密接を避ける暮らしは続く。でも、少しだけ密になった魚さんたちとの仲は、このままにしたい気もする。疎遠になるのはちょっと寂しい。

編集手帳

空豆は若い緑のサヤを空に向けて立つことから、その名がついた。「5月の豆」とも呼ばれ、今頃の時節に焼いたり、ゆでたりしたものがビールのお供になる◆例年なら、居酒屋などで飛ぶように売れたのかもしれない。何日か前、近所の青果店で袋詰めを勧められた。今年は暖冬のため実がふっくらして上出来に育ちながら、需要の低迷でかなり安いのだという。農家の方々はさぞ残念なことだろう◆気温が汗をかくほどに高くなるなか、39県で緊急事態宣言が解かれる見通しになった。居酒屋で味わう冷えたビールとのコンビに、間に合った地域があるということだろう◆とはいえ、加減よく踏み出していただきたい。宣言の解除は安全宣言ではないのだから…と、とりあえず申し上げておくものの、何日も続けて感染者を出さなかったのは地域の努力の成果にほかならない。緩みは禁物だが、頑張った人にはご褒美が必要である◆それにしても青果店で手にとった空豆の値は生産者が気の毒になるほどだった。素十の句を思い出す。＜豆飯に一汁あればよからんか＞。豆ご飯なら、どの地域の人も旬に間に合う。

編集手帳

ドイツの児童文学者、ミヒャエル・エンデの童話『モモ』に時間を盗む男たちが出てくる。「時間を貯蓄すれば命が倍になる」と偽り、人々は不要と思った時間を預けてしまうのだ◆理髪店の主人がはたと気づく。客との会話をやめ、急いで仕上げるようにしたところ、ちっとも楽しくないことに。たわいないおしゃべりの時間が仕事を豊かにしていたのを自覚するのだが、今これに似た喪失感を抱くのは理髪業の方ばかりではあるまい◆コロナ対策で抑制を求められる生活習慣の一つに、おしゃべりがある。複数で話すときはマスクを着け、距離を開けましょうと◆恐らく、そこまでして語らっても以前の心地はないだろう。最近、感染症の拡大以前に制作されたテレビドラマを見てドキッとすることがある。オフィス、居酒屋、公園…どんな場所であろうと、登場人物らが顔を寄せて会話する場面にいちいち胸がざわつく◆今の我慢が本来めざすべきは、楽しくおしゃべりのできる「3密」に戻ることなのに、忌むべきもののように錯覚している。おかしい。ウイルスに豊かな時間を盗まれてしまったからだろう。

2020. 5.16

編集手帳

町工場で半世紀、旋盤工を務めた作家の小関智弘さんは、見習工になったばかりの帰りしな、先輩から諭された。働く、とは傍楽だ、お前さんが働けば、お袋さんが楽をする。傍を楽にさせる、働くってのは辛いものよ――◆心に滲み入り、ノートに書き留めたそうだ。歳月と共にメモは増え続け、後に一冊の本になった。『現場で生まれた100のことば』（早川書房）である◆「技は指で憶えて、腕に貯金しておきなさい」「泣きごとばかり並べていると仕事が逃げていく」「合理化と手ぬきはちがう」…。仲間を励まし、勇気づけただろう寸言の数々に思う。教えを請いたい。この窮地を、どんな心持ちではねのければいいのか、を◆大手製造各社がこの先の厳しい経営見通しを示している。営業利益は8割減、リーマン・ショック以上の落ち込み等々。きつい知らせに憂慮するのが、その裾野に広がる数多の町工場の行く末である。既に受注減や納品の先延ばしといった影響が見られるという◆先の本にはこんな言葉もあった。「（社員に）うちの強みは、お前らや」。この国の強みを何としてでも守りたい。

2020. 5.17

編集手帳

答えに窮する子供の質問がある。友達より誕生日が来るのが遅いのに、どうして早生まれって言うの？◆うまく説明できずにいたが、佐藤秀夫さんの「学校ことはじめ事典」（小学館）に明快な答えがあった。早生まれ、遅生まれという呼び方は、同じ年に生まれた子で学校に入学するのが早いか遅いかで付けられた。明治時代に、学校の始業が4月に統一されたことによる副産物だそうだ◆それまでは、日本でも多くの学校が9月始まりだった。1886年に徴兵令が改正され、陸軍に人材を奪われまいと師範学校が4月入学を採用した歴史がある。国の会計年度と合わせる目的もあり、「要するに軍と役人の都合」と佐藤さんは記す◆長期化する学校休校の対応として、政府が検討する9月入学・始業に賛否が渦巻いている。学習の遅れを取り戻すには必要だという一方、学校現場の負担を増やすべきではないとの反対意見もうなずける。よく議論してもらいたい◆本紙川柳欄から引く。〈ランドセル桜似合うか秋桜か〉。どちらも似合う。子供に説明しづらい結果にならないようお願いする。

2020. 5.18

交遊抄

バッテリーを組んだ仲

亀岡　偉民

1978年11月21日。私は東京・平河町の船田中・自民党副総裁の事務所で、江川卓君が記者会見するのをそばで見ていた。作新学院の野球部でバッテリーを組んだ仲だ。ドラフト会議の前日に読売巨人軍と契約した「空白の1日」。球界は大揺れとなったが、会見場では「入団は自分が決めた」と淡々としていた。

余計なことは言わずに全力を尽くすのが常だった。巨人軍に入団後は「ヒール」のイメージがつきまとったが、実際は冗談好きで、野球部ではムードメーカーだった。別々の大学へ進んでも、春の野球シーズンが終われば2人とも母校に戻って後輩の指導をした。三日三晩、徹夜でマージャンをしたこともある。

優しい男で、誰かに相談されると周囲が心配してしまうほど親身になって対応していた。最後までインコースを投げなかったのは、高校時代にデッドボールを耳に受けたからだ。父親に「自分の力で立て」と言われて自力で歩いていたが、他の人には同じ目に遭わせられないと思ったのではないか。

手弁当で私の選挙を手伝ってくれたことが何度かある。私も何かで恩返ししたいが一向に頼んでこないので困る。「してもらったことは忘れず、してあげたことは忘れる」という彼らしい。（かめおか・よしたみ＝文部科学副大臣）

2020. 5. 19

春秋

世界に冠たるニッポンのものづくりを支えるものとは、例えば1本の小さなネジである。小型自動車1台に3000点、大型ジェット機ともなると、実に1機に300万点のネジ部品が使われているという。大手精密機器メーカーのホームページにそんな記述があった。

▼ネジの本質についての解説が興味深い。いわく、「通常は締まっていなければなりません。しかし、外せないように結合してしまうと保守や点検といったメンテナンスや修理などができなくなります」。つまり、「緩めること」も重要な機能だというのだ。日本のメーカーは、相反する働きを調和させる高品質を実現した。

▼新型コロナウイルス禍に伴う緊急事態宣言が39県で解除されたこの週末。宣言が続く8都道府県の繁華街や行楽地でも、人出が戻りつつある。政府は、「気の緩みが心配」と繰り返し、人々を戒めた。確かに正論である。だが、ネット上では、「国民だけが悪いのか」と反発する声も。メッセージの発しかたに工夫も要る。

▼人出を過去の数値と比較するだけでなく、感染拡大を防ぐ「新たな生活様式」を定着させつつ経済活動を再起動する。そんな発信も必要だろう。落語家の桂枝雀さんは、「笑いは緊張の緩和で生じる」と説いた。ネジの本質にも通じる洞察だ。今の緊張がどんな条件の下で緩和できるのか。笑顔を取り戻す道筋も考えたい。

編集手帳

ロッキード事件など政界疑獄の捜査を指揮した故・吉永祐介さんが、検事総長の就任記者会見で語ったのは汚職摘発への意欲ではなかった◆組織の説明から始めたのである。「検事は準司法官です」と。目の前で聞いていたので、よく覚えている。準司法官とは法律にある言葉ではない。三権のうち行政の一部でありながら、司法に準じる権限を持つ微妙な位置を国民に理解してもらいたかったのだろう◆当時はゼネコン汚職事件のさなかで、検事が取り調べ中に暴行事件を起こし、検察権力への国民の信頼が揺らいでいた◆政府からの独立性――吉永さんが微妙な足元を気にしたことは確かだろう。独立性の揺れる日が来るなら検察が暴走した時かと思っていた身には、必然が見当たらないことに疑問を禁じ得ない。政府と準司法官の関係を変えかねない検察庁法改正案である。幹部の定年を内閣が延長できるとした特例規定に、政治家の顔色をうかがうようになっては困ると世論の反発は強い◆政府は今国会の成立を見送り、秋の臨時国会でやり直す方針という。ただ涼しい季節が来ても、世論は冷えてはいまい。

2020. 5. 19

交遊抄

誕生日会のお題

下村　輝夫

毎年夏が近づくと、携帯電話のバイブレーションとともに届く一通の招待状が楽しみになる。「今回のお題は『赤』だよ」。一斉メールの差出人は、コピーライターの石丸美奈子さん。10年ほど前に別の大学の経営審議会で隣の席に座って以来、年1回の交流が続いている。

8月に開かれる彼女の誕生日会は、平日でも60人以上が集まるビッグイベントだ。毎年お題が与えられ、「赤」であれば赤い衣装を身につけるといった各自の工夫が求められる。「英語しか話さない」の場合、英語が苦手な人も一生懸命しゃべろうとして盛り上がる。

北九州市内のホテルやコンサートホールなどに集まる参加者の顔ぶれは、地元の経済界トップから文化人、伝説のバーのママまで幅広い。話が面白くて、誰も傷つけない。「言葉の魔術師」という称号がふさわしい、彼女のとりこになった人たちが集まっている。

堅くて狭い教員の世界にいる私にとって、違った視点が見えてくるこうした交流は貴重な財産だ。学生には幅広い人脈を培うことの大切さを説いているが、その重要性を改めて実感する。

今年は新型コロナウイルスの感染拡大などの影響で中止の方向とのことだが、再開メールを心待ちにしている。（しもむら・てるお＝福岡工業大学学長）

2020. 5. 20

春秋

〈そこに行けば　どんな夢も　かなうという……。1978年から79年にかけてヒットした「ガンダーラ」の出だしである。だれもが胸のうちにいだくユートピアへのあこがれを、切なくうたいあげた。ドラマの主題歌だったこともあり、ご記憶の方は少なくあるまい。

▼本当に理想郷だったかはともかく、ガンダーラはかつて実在した王国の名前である。仏教美術が栄えたことで知られる。現代の世界地図でいえばパキスタン北西部からアフガニスタン東部にかけての地域。振り返ると不思議な気分になるのだが、日本で「ガンダーラ」がはやっていたころ、かの地は激動に見舞われていた。

▼クーデターでアフガニスタンに社会主義政権が誕生したのは78年。翌年にソ連軍が侵攻し冷戦の主戦場のひとつになった。以来、戦火が絶えることはなかった、そんな印象がある。ソ連軍が撤退すると、やがてイスラム原理主義者の集団であるタリバンが台頭し、米国が主導する「テロとの戦い」の前線となったのである。

▼往時を知る人の回想によれば、クーデター以前のアフガニスタンはとても美しく何度でも訪れたくなる国だった。この40年あまりは一体なんだったのか。胸が痛む。首都カブールでは今週はじめ、昨年9月の大統領選挙から続いていた政治対立がひとまず落ち着いた。美しいアフガニスタンの再建へ向けた一歩に、と願う。

編集手帳

スズメは年中そこらにいるため季語のくくりはない。ただ「スズメの子」となると、春に分類されている◆人雀の子そこのけお馬が通る／何年か前、この著名な一茶の句を眺めていてふと思った。そういえば、スズメの子を見たことがあっただろうかと。明治に活躍した俳人、藤井紫影にも散歩道で会ったらしいスズメの子の句がある。人子雀の一尺飛んで親を見る／◆綿毛のとれたばかりの羽で巣から降り、ちょこちょこと不安げに飛ぶ練習をする姿だろう。ものの本によれば、親と一緒にいるのは10日ほどらしく、どうやら今年も見る機会を逸しそうである◆しかし代わりにというと変だけれど、このごろ散歩道で多く見かけるのは人間の子供たちである。ある男子のグループが同じ広場に集まってくる。午前中はゴムボールで野球、午後はサッカーと思ったら、翌日は午前にサッカー、午後に野球をしていた◆勉強はいつしているのだろう？　心配になるものの、笑みがこぼれて楽しそうである。学校の休みが続く異常な春のもと、元気に外に出て、子供たちなりに飛ぶ練習をしているのかもしれない。

2020. 5. 20

春秋

焼け跡に闇市が並ぶ東京。終戦後の混沌たる世相を背景に、坊や哲、ドサ健、上州虎、出目徳といった面々が日夜、知恵と勘の勝負に挑む――。といえば、阿佐田哲也さんの小説「麻雀放浪記」である。モノクロで撮られた往年の映画化作品も、もの悲しく美しかった。

▼現代ニッポンのこの人たちは、どんな気分で卓を囲んでいたのだろう。黒川弘務・東京高検検事長、産経新聞のA記者とB記者、朝日新聞の元記者というメンツだ。A記者の自宅をジャン荘がわりに、コロナ緊急事態もなんのその、宵の口から未明まで賭けマージャンに興じていたという。唾棄すべき光景というほかない。

▼黒川検事長といえば、定年延長問題のまさしく当事者である。渦中のその人を、私宅に招き入れてのロンチーポンとは神経が太い。こんな検察官は一握り、こういう記者も一握りだと小欄としては言いたいが、世間は権力とメディアとの癒着の図式に大いに憤慨していよう。自戒をこめてこれを書きつつ、無念が募るのだ。

▼それにしても「週刊文春」が報じたこの不祥事の、なんと奇怪なことか。検事長の驚くべきワキの甘さが浮かび、特別扱いしたこと自体のゆがみは露呈した。しかし一方で、政治が検察を抑える口実に使われぬとも限らず、ひどく入り組んだ筋立てに見える。ドサ健や出目徳の出てくる物語のような余韻は、どこにもない。

編集手帳

6年ほど前、記事を読んでうれしくなったことがある。英国の人気歌手オリー・マーズさんが「上を向いて歩こう」を歌うというのだ◆スキヤキソングとして海外に広く知られた英語詞には、星の瞬く夜空を仰ぎ、涙がこぼれないようにする場面はない。正しく分かってもらおうと、オノ・ヨーコさんが永六輔さんの詞の趣旨を忠実に訳したものだ◆題は「ルック・アット・ザ・スカイ」。震災など苦しいことがある度に寄り添ってくれた歌は、今ならもっと世界の人の心を動かすだろう。夜空のにじむ星を眺める人は地球に何十億人といよう◆かと思えば海外からは、空とは逆方向の自分の足元を心配げに眺める人の話題が多い。コロナ問題を巡る米中の批判合戦である。トランプ大統領は秋の大統領選に向け、国民の怒りをあおっている。かたや中国が自らの非を語らず強硬姿勢を崩さないのは、きょう北京で開幕する全人代で習近平国家主席が胸を張るためらしい◆世界が協調して危機に立ち向かうことがそっちのけに見える。人類が涙をこらえて歩かなければならない時間にも、少なからずかかわるのだろう。